

## 四国コンクリート研究会

「四国のインフラの将来と課題に関する講演会」および「四国のインフラの将来に関する研究委員会」第2回 議事録

1.日時：平成15年12月2日（火）13:30～16:30

2.場所：香川大学 地域開発共同研究センター

3.出席者（敬称略、順不同）：堺，草薙，増島，田野，秋月，藤井，金山，穴吹，長町，原田，四国コンクリート研究会会員

### 4.配布資料

- ・ 資料 1-1：地方圏の行方を考える 講演概要
- ・ 資料 1-2： 同上 講演データ
- ・ 資料 1-3：四国の観光資源 講演概要
- ・ 資料 1-4： 同上 パンフレット

### 5.講演：下記による

#### (1)挨拶

四国コンクリート研究会 会長 堺孝司

#### (2)地方圏の行方を考える

（財）都市づくりパブリックデザインセンター 理事長 荒木英昭

講演内容：講演概要（資料1-1）講演データ（資料1-2）

#### (3)四国の観光資源

（社）香川県観光協会 専務理事 松岡勝哉

講演内容：講演概要（資料1-3）パンフレット（資料1-4）

### 6.議事：意見交換：下記議事録による

- ・今は質が求められる時代である。
- ・屋島（高松市管理）の廃墟のホテルなどが残っているのは景観的にどうにかできないものか。地元の人が行きたがらないところに観光客は行きたがらないのではないか。  
現在、廃屋は11の所有者がいて所有者に対してのヒアリングは終了している。土地は屋島寺の所有であり住職の判断も必要である。ドライブウェイは琴電の所有である。足元の照明の検討などを含め少しずつ前向きに話は進んでいる。
- ・人工物のために屋島のイメージは下がっている。
- ・県外から来た人は外からの視野で価値を判断してしまうので、外からの視野も考えていくべきではないか。身近にあるものをみいだすのは難しい。
- ・地方と都市の人材の交流から魅力の掘り起しができるのではないか。地域活性の非常に重要な要素になるのではないか。
- ・最先端の人材は少ないが、優秀な人材は平均的に配属されている。
- ・差別化をすればまだまだやるべき公共事業はある。
- ・小都市の衰退をくいとめる方法 日本人は文化・歴史と町との結びつきのある町

づくりが必要となる。

- ・大規模や大量という時代は終わった。考えるところに道はひらけるのではないか。
- ・過疎から山村のほうへ人を呼び戻そうとする考えから過疎地域をなくしていこう。
- ・ヨーロッパなどでは小さな町でもオープンカフェなどがあり栄えているが、日本ではそういったものがない。
- ・景観はこれからストックである。これからどうしていけばいいか考える必要がある。

{ 美観的なもの  
{ 緑地的なもの

- ・ベネッセのホテル、直島の古い町並みを保存しようとする。それらの資源を育てていこうというふうになっている。
- ・交通アクセスにしても資源があってもそれに対応するシステムがない。
- ・自然を破壊しようとは誰も思っていない。やるべきことがあってやってきたこと。
- ・四国をどうとらえて、どうしていきたいのか四国に住んでいる人の意思によって方向が決まってくる。
- ・四国で仕事をやっていく上で私たちがもっている価値・資源をあらためて問い直して、具体的な仕事の形にしていく努力をしていくべきである。
- ・それぞれがそれぞれの立場でこの問題を考えて、四国が少しでもよくなればいい。

#### 7. 第4回研究会について

- ・ 日時：決定次第メールにて通知する。
- ・ 場所：香川大学